学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究
― 子どもや学級集団へのアプローチと教師との連携をめぐって ―

1．研究目的

本コロキアムでは、学校現場において心理臨床家がどのような関わりをなしうるかについて、各自の学校現場での体験や悩みを共有する場を設けたり、実際に学校に訪問して現場の実践に触れ、働きかけたりすることを通して検討を行ってきた。本年度は、昨年度まで取り組んできた①現場体験検討会②『アラン・プロジェクト』に加え、③教師の「発達障害」事例の見方と関わり方に関する研究④研修会を企画し、特に子どもや学級集団へのアプローチと教師との連携について検討を行うことを目的とした。

2．現場体験検討会

本コロキアムでは、月１回程度のペースで各々が学校現場や学校関連施設での体験報告を行い、ディスカッションを行うという取り組みを長年続けてきている。現場体験検討会は、他の参加者を参照枠としながら自身の取り組みを整理し、相対化できることや、学校の枠組みにおける臨床的な関わり方の独自性、及びその可能性と限界について考え、その意味を見直すことができることなど、さまざまな意義があると考えられる。そして、報告者や参加者の学校現場での実践を支え、よりよい実践を行うことに貢献しうるものである。

3．『アラン・プロジェクト』

昨年度、本コロキアムメンバーは新しい教育関係ユニットにおいて行った『アラン・プロジェクト』に加わり、スイス、チューリッヒ教育大学のアラン・グッゲンビュール教授が考案した『ミソドラマ』という新しい手法を、日本の学級で実施した。ミソドラマでは、物語を用いた間接的な手法を用いることによって、子どもたちが自分の葛藤や悩み、あるいは、その解決法への示唆などを表現しやすくなり、また、そうした表現が、教師が生徒の問題を理解する手がかりになり得ると考えられている。

ミソドラマを実施した学校では、ミソドラマが学級に直接的な影響を与えたとは一概に言えないが、子どもたちの持つエネルギーが活性化され、学級の変化につながるきっかけになったとも考えられた。加えて、クラス集団の持っているテーマが明確になり、教師や生徒を含めたクラス内で課題となるテーマが言語化され、意識化されたという成果もあった。

本年度は今後、教師がミソドラマを実施し、学級集団にアプローチできるように、ハンドブックの作成に取り組んでいる。教師がミソドラマを実施することは、学級集団の課題を生徒と共有したり、新たな気づきや変化が生まれる機会を提供する可能性があり、学級崩壊などの集団の力が発揮できない事態に何らかの刺激を与え、集団の力が活性化される契機ともなりうるであろう。そのため、ハンドブックが公刊され、ミソドラマを学校現場で実施できるようにすることの意義は大きいと言えるだろう。

▶ミソドラマに用いた紙芝居の例

4．教師の「発達障害」事例の見方と関わり方に関する研究

近年、学校現場では「発達障害」が主要なトピックの１つとなっている。そして心理臨床家も、「発達障害」事例に対する見方や関わり方について、学校現場で意見を求められたり、教職員と話し合うことが多い。しかしながら、実際の学校現場では各々の職務で多忙であることなどから、互いにじっくりと話し合う時間が持てず、両者の専門性を活かした視点をすり合わせることが十分にはできていないことも少なくない。このようなことから、時に心理臨床家は教師の「発達障害」の見方や関わり方がどのようなものか、十分に把握できていないまま、教師と連携したり、コンサルテーションを行うこともあるのが現状である。そのため、まずは教師が「発達障害」をどのように捉え、関わるのかを明らかにすることが求められる。

本コロキアムでは、以上の問題意識のもと、調査研究を実施中である。具体的には、まず①「発達障害」の診断の有無によって、教師の事例の見方や関わり方が変わるのかについて検討することで、教師の「発達障害」に対する捉え方や関わり方について示唆を得ることを目指している。さらに、②インタビュー調査を行うことで、教師の「発達障害」に対する捉え方や関わり方についてのより詳細なありようを明らかにしていきたい。

5．研修会

学校現場においては、いかに現場の教職員と心理臨床家が双方の専門性を活かしながら連携していくかが非常に重要なテーマとなる。今後、教職員と心理臨床家が子どもの事例をどのように見立て、関わるかをテーマとした研修会も実施する予定である。研修会を通して、互いの見方や関わり方から学び、子どもに対する理解を深めるとともに、今後の連携やネットワーク作りに活かすことができると考えられる。

（文責：永山　智之）